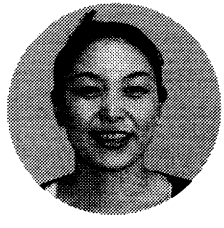
異文化と心通わせ

つくば通信 ㊽

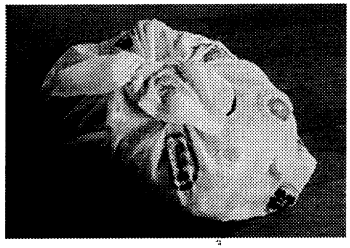
村田　佳子

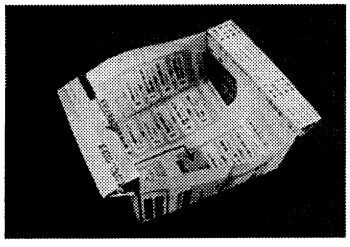


日本のエコバッグ

7月14日土曜日、朝10時半、たまたま用事があって東京・銀座にいました。

台風が来るかもしれないという週末、行き交う人の傘の間を縫って細い通りから早足で大通りに出ました。すると目の前には長蛇の列。ディズニーランドやお台場のアトラクションでは経験したことがある方もいると思いますが、銀座でこんな行列は見たことがなかったので何事かと思いました。





風呂敷型のバッグ、殻入れ

並んでいる人の層も、アイドルを追いかけるにはちょっと落ち着いた雰囲気ですし、コンサート会場なども見当たりません。行列の前の方にいる若い女性に聞いてみました。その女性は「エコバックなんですけどぉ、もう売り切れちゃったみたいで。なんで!?って感じなんですけど」。傘の下で納得いかない表情を浮かべていました。

家に帰ってニュースを見て初めて知りました。その日は世界で展開しているある有名ブランドの限定品の布バッグ、いわゆるエコバッグの販売日だったのです。通常、高額のカバンを販売するそのお店で、2100円でエコバッグを販売するのだから殺到するのも分かります。台湾で行われた同様の企画の際には、混乱して人の下敷きになった数名がけがをしたそうです。

台湾でも日本でも、そのブランドのファンという人のほか、限定品だからオークションで高く売りたいという人も並んでいたようでした。

今回の銀座のお店では前日など早い時間からの行列を禁止し、整理券を配るのは朝の8時以降と告知したものの、その騒動が危険な状態と判断したため朝の4時に整理券を配ったようです。言われた通りお店が開店する時間に来た客はすでに販売が終了していたことに気づき「どういうこと?話が違う」。憤慨していたのです。

さてエコバックの騒動がありましたが、そもそもエコバッグがはやるもっと前、ビニールのレジ袋が一般的でなかったころのことを考えてみると、近所のお店に行くときは手提げを持っていましたし、お豆腐屋さんにはボールを持って買いに来る人がいました。また、私は風呂敷や風呂敷にマチを作って結べるようにしてもらった袋をずっと愛用していますが、形も自由自在で結構な容量のわりに必要がないときは小さくたためる優れものです。折りたためて何度でも使える、という点で風呂敷は世界に誇れる日本の元祖エコバッグかもしれない、なんて思いました。

他の身近な「エコ」を考えるとチラシの裏はメモ用紙、両面刷のチラシは果物の皮やピーナッツの殻を入れる入れ物として折り紙をしてとって置くのは多くの家庭で行われているでしょう。その「殻入れ」ですが、こんな交流の場をつくってくれたことがありました。外国人研修生たちと小さなパーティーでピーナッツを食べていたときです。しゃべりながら手元にあったA4の用紙で「殻入れ」を作って差し出したらとてもびっくりされ、その瞬間、その場が折り紙教室になったのです。

今回のエコバック騒動、ちょっと身近なエコを考えてみるいい機会になりました。

（鶴岡市出身、JICA筑波国際センター・クリニックコーディネーター）